

門口9  
號3896  
卷2

大學圖書館  
號27.6.25文  
藏書

開路指南車 下卷

阿州 和田耕齋 述



文稿山役中 美之役中ト相付

一筆聲とは乍先管事おへつ 何時も清時も思ひ出る  
家自度年年以次おれまき已九夏二伏と夏閏秋  
月もあゝ波るのもお詫びの如く又も中ト木茅春  
谷八百石代、某行常盤木ト久々おれ役在御代  
のあてごん そどす  
しもる麦飯と云ふとて稗累稼も粉或ハ雜炊

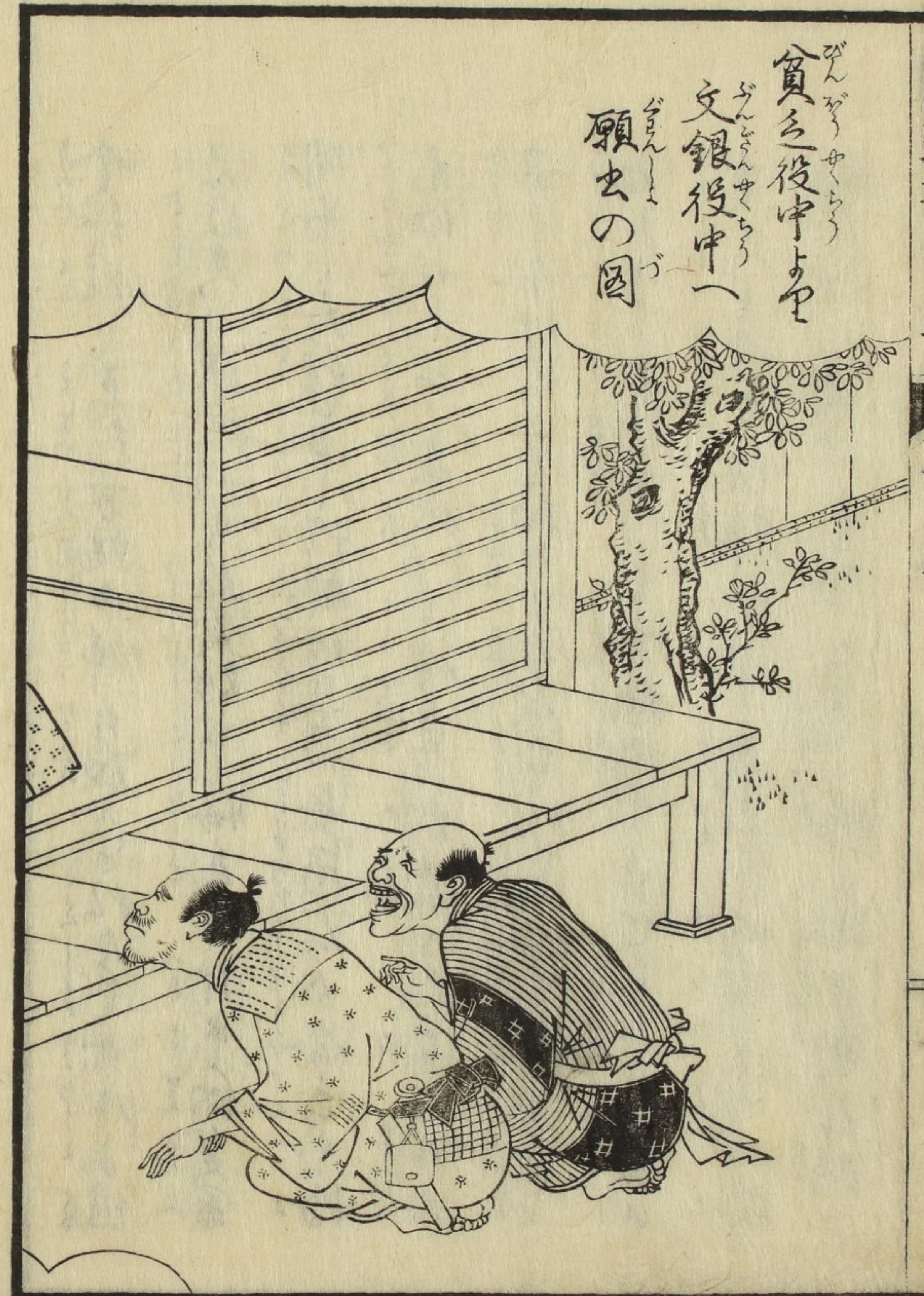
結持とあまく新柳腰一つ頂戴は既て後禊と被縕  
れりてんがいのきりえんのまくらのものすりと  
縷抱るを風と凌れ人なるも食れ、茶と外山修止  
えどもまうべのまぶといひ、さうあらうまくよぢ  
よしりと仰てはりて心意地と以て新食一切を済  
じるふとおもてのあざとつまとのまよめあるせと  
免れと極めて甘露味悲喜天と御事無を修令  
まなむに徳と年々か内に山野やと度を以度のあ  
とくやまのへあひまくへまんまくまうめうりもそりと  
急角役綱と勅園爰ひ左引は既至ひ和音又と機  
あひせま  
お迎て女役筆書中やとて織、往古よりれと同役と申宿  
みのせうへちんせうらわくとあはれー やうく中のあくとけそゆまと  
氣と手を以役柄は未だとて代後幕と以助と修緒

祈福文余堂塔基清と言ひれども代多故以斯給卒  
がんまびくもあきをあきをあきをあきをあきをあきをあきをあきを  
此處お仕合まねひと我近年世とと美端花美とお成  
すうちまづのえんまくまへりまくまくまくまくまく  
と中下に二段幕施引木をか物安成行とて御方大  
ちう  
首も今と手の變ひ行を也て縦引と施誠り、下おまく  
しのまくまづのまくまづのまくまづのまくまづのまく  
不為縫藉とくとくと忍入義と度にわるもやと乍まく施  
いのまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく  
了く内六力縫乞者とお成る焉至日雇梓下種  
くまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく  
し振く有くまくまくまくまくまくまくまくまくまく  
綱りるも幕一定とお成りの程にはまくまくと越立身

不調に半と家様方の私財とハ是用へ施丁し角を  
窓役と裏役と差別有し衣食住異不是制裏  
又合限るハ事無此役と雖誠幕内は用物と結  
識れ總て傍シモ而し物と山廬内中は役若用は服  
金銀経せて施丁至也や安と成幕内も越後に  
お忍へやれ我を重慶に咎やあひ金と光と  
以れ故に義田役と稱是役外者て云源とお達  
とぞえも見てかみとまつあくまのどえをうちこち  
門生は反對する所多々有くおもに内室門子達

金銀経せ若れ万端四神を取れどれなし女房の経  
不段大と義田も雖成持て悔立り付キ猶莫要  
兄弟と産婦も理解仕ひハ無相向ら令島モ乃  
不仕が斗麦代と経歷は武東うみを出され  
多く上げて己の袖とお盆下トロハ遂惑ふ事も  
此と少す恩極方とも金銀出でせ事下る度に  
其人を恃た因極つて一度忍ひ何時もろゝお  
報く城と盜出一の船お運云給云給ま致云極

貧乏役中より  
文銀役中一  
願虫の圖



履跡オ南車

下卷

四

えどきうちれあい事ぐはじめどがくのうち あ いえまでよなづ  
東方ひ更にお準教サ國役レ申ハ十ヶ九人と不參  
ま てちのくの いひ まね かんげん じゆく  
考る名掲々在莫とよびひを詔と失ひ付度く  
ゲ みりやの かれうあせすら へ えまき  
下車後御山御船お此作付ひも是全く強き  
てあ へもそおトヒ ちくくも み あくちく  
すあらはれをとひ無然六勢くひと付ば當くりく  
の おうさんまことかくをうらう一どりんも うそそそりんじく  
く志天石を爲思えせは年早緩少候森あ暴風  
の おんまてんのかおうふううじや おなぜの うちうてんじの せき  
く天災てくの何ゆの度ひ是今人未改ひあくは  
わく天の悔くあく石走大風く打れて天に燒  
くちうまぢしんの こち り せあま てうそらんお  
付皆あ地震くちかくひて東洋く天ト憲れけ  
行

時ふふよしやりくも禽々固てあれ御と申す事  
かれがれももあれも どんごどうえん あくまよ  
思多也喪也禽也云語用ひふは度若掲宣  
きの見せびん そくよひまくの ひんじんもの  
史も少役掲とひて能くふ事も實人まくちぐ  
ら金錢も少若掲ハ本掲の限多下前引の物と  
かんじくへまされ しんさくさんさうあそくせらきけうの てん けうの  
少の天道川のあらわ成京してハ京と  
えどんの てん は まどの まお おの てん かの の えどく  
上は戸も天も江戸もと御山も天も清山もと余戸  
へうるあるも あらうるもうううう あくまき  
を絶も重ね少ひと多御と掲くも今も多の夏

どもよきとばせられずかとうへ わんくの まよひよごわんの  
おみ遊脚ち後外所を年々と貢也大至年を  
時々茶麦を以て下車する勿縫下車へ決山  
四度外に茶葉亦種もとるが、此石とひまは一向  
不思ト代す四年を以てを或ハ歛下車とく爲  
ひきよも事なハわんみしんあくいくの かんト  
然れど至りてもたれ已經有也不思外也驕慢  
ひきよも事なハわんみしんあくいくの かんセキヤリされ  
ひきよも事なハわんみしんあくいくの かんセキヤリされ  
もおめりも是全幕降ら席に成り者無力もひ  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
萬力も莫大右招き放行すれ正月來程ゆゑ  
せうへうとごんゆきえもとゆうどりてんせぎんぐの  
言を乞度シ後約所取トキスル有天命矣之を

族と以助立トツド一統尼をもて御令限りつて天通  
あんうしがあをれなま やうわんの さく  
左進御候急からそ年々氣假とア隊行ト日又弔  
のちくくくふせりのき おんみせんまちうじうんと  
之言借書布施ねし處ハ以身かお身ての意も  
おあみあじあうふよびりとお身かお身キドく あるひとのよ  
内事ナリとレ一切戎物ミセ忍てる身に求人をも  
左ハ君身を親乃の信ハ佛口づきのとてつるほも  
だらのいみかんきよなきれもくさんなまし  
右あもと茶湯嘴を下車宜多少軽す  
世の中の素比盤と向ぐみ毛車角金銀穿もえ乃翁  
清同無事の時モリテ旅も抱憂浮世も涉ぬども

不平歌合と譯文

月日

貧乏相勢代

鶴鳩翁のあもん

文浪抄

閑か能く清門様

わく御内役寢候不知を早揚へましゆ中入ま形よひ

高僧とせよ主人の老成貌不孝ひるのそきとぞまことある  
約でもち細ぐ大ゆうじや歎ての藝名もさうい初めりへ  
伊藤通様乃より極どもるが道くよきにゆて清門近様此

お僕が出來るこれハ初の生ひ乍らあく取るのトやあう  
コハラヤとゆすても情也一して又難がま細と弱りと扱ふ  
と細もよしとあると云ふやんまに取る  
世乃中もとあふとものも人比や○とよ細とせり  
「ひよ細くりのや○とよ間てゐるがよびと間り  
車よ安つて下さる方が何ら金湯でひあいこうられまうの  
中へゆりやうと仕立乃時下されとまむりすま○がよ  
が色づくと同る見えうる人ともまだべくやのあ  
て教てどうするふしのまどや正氣トやも正氣が勇氣と

シニ鬼とほの風で思ふてひそむるあの鐘鳴乃は覺  
それゆく處ふうけて是バあくまをひひにあり鐘鳴揚乃  
まことのトや大意が天心トやてハありとひよ  
ウムハモレハモリのござりてひそむやども  
シテハモレハモリのござりてひそむやども

つけとくろとくろのトやげ

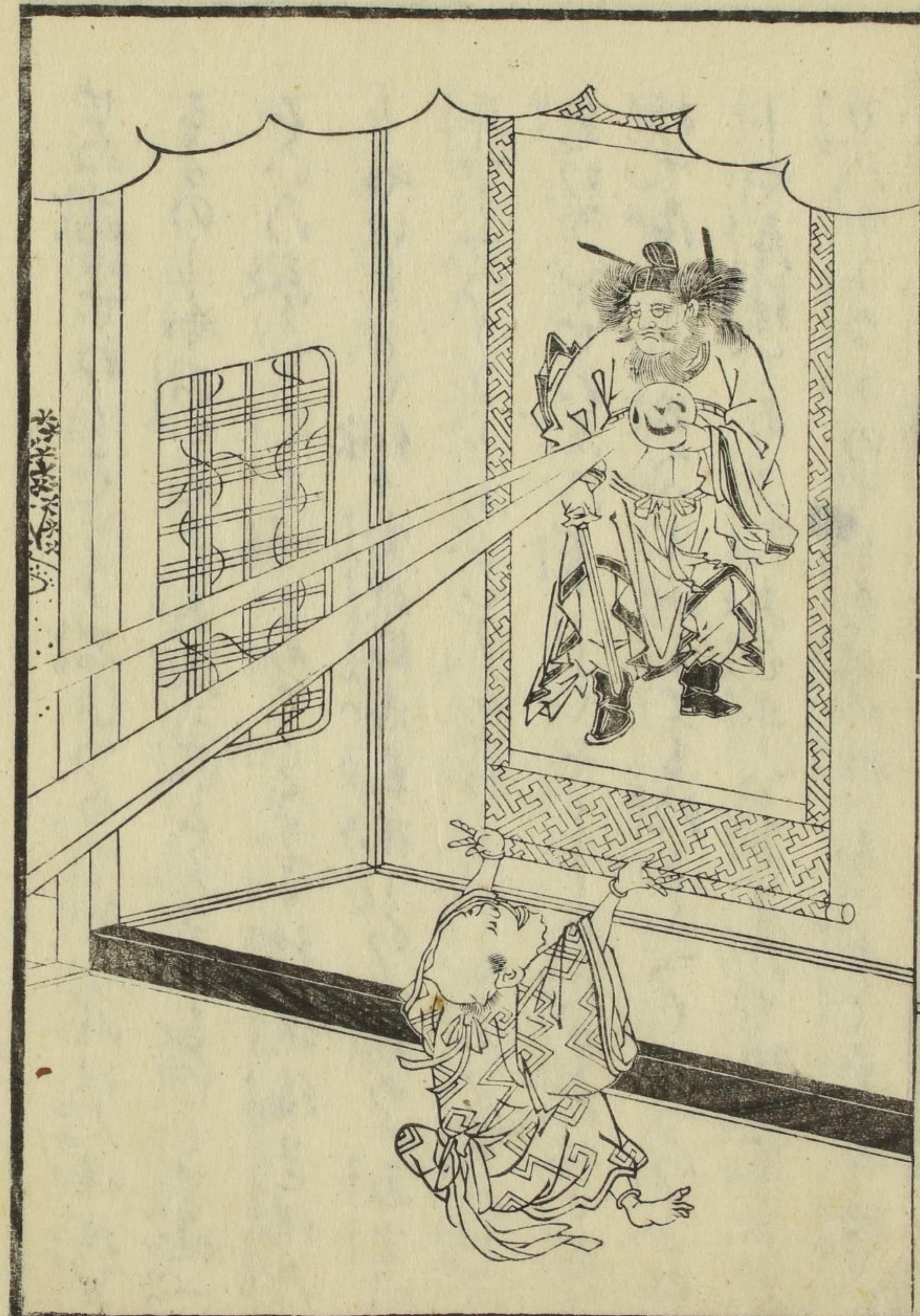
うくうくあけむと大意くわく一ツでくうしんとせ  
あくうとくぐるもくろび横道へ経とあでふとけつとくづ  
うける事と氣がつゝく誰も情もひなけれどもくづ

せぬ病せぬとぞうう思ひつゝて御代に大懶我と  
そののトやふとやきあふもいそとでもととて地一  
もいれおとすとてはくもとてござるが神道徳を佛名  
トやけきとも行々食欲勝惡病もよ鬼もやあ方け  
耳とあつうとあくとてちよつも實きをね毛  
鬼かうとせぬか乃奉トやそうとて入生れ付と鬼  
おきて居るうと思くばどよもれくへとくつてこの  
トや座付であるがまひ斗とトされてゆるてと  
刀乃やうるまので生き付の精ハあくわくとく精乃

隱路打車

卷八

八



蜀客指南

卷八

八



出來て時わがでもしてかけどん小辛勞うつ  
てもびりくもるこあそれとすへせば小辛勞とかつじ  
大経うへ斗ドやふへんまでひてをむの鐵ハムる塔  
禍乃赤鬼よめて炭うきともあらぬ極よひりますま  
くのりので爲化小故とりうては禍ませぬやく、  
素が純力トやそとすへ一向せば禍くまもづの事  
トやかく不思用な燒麻や純毒ひづくろりの五の、  
車打がわく安いぞう禍うなければやもう力で一生  
さうきる危角禍くまつてハ何ともあらぬもとゆ  
く

清をほほに神仙聖人様トやとて中へ來よ河の仕事が  
ゆゑこのじやもい一生のるくろりせんじく風うそ  
仕事へりぞれての勤トよきくあと大庭なつひ  
筋徳もつみてたまふとひんもうたまうてこち  
らづ月水へるへねやどたまうけゆとひがれあつてき  
ぐふ今日トやきのくまゆとつすもともひ斗つて  
仕事ドやひ小憤ふとバカラ影や立家がまよるひ  
よきぐふとひくべあく小郎がりうそのひがくとひも  
きくわが耳のすみのをきにとれうけとあがむへ

てちんにすの御のドやりすまつも  
故もあべとあらとあとくつとじくらのを  
ましに來るもれ旅乃川づくまのまよの  
うのまよあられまづくまとももとじくら  
あづくまつものとまくまくもとじくら  
世界中が御連挿よもとトされ又もとじくら  
トまきとりのとまくもとじくらと多ひ  
也くまくはまあ何のひ身ぞ西益地  
ちがくまの御せらてハ唐不どの御恩詔ド

子孫と同義に書はずので御事の精出してよいもひと  
して年もめでて承りんでもりまへ書ハ御日も目義  
書まへ年內余毛うやかたよとす人まへん  
後もとゆきとゆきとゆきとて情りゆきとゆき  
わねバ又世界がどうふある祝不孝や人教ノヤ人情  
や憲城とくほしてあつまうどうじや御上乃御  
憲うがゆるので世界がくまうてゆる今憲うも  
つた憲うもと憲うのドやうてゆる事ドや承  
くまうてゆる人うが行う足見よもとあ誠度ハ改

ばよゆ切小いとて是る人のあるぞうとがくらげ何乃  
あの處がどの位乃人でと思ひ純もとゆ小緒きると  
それへこち乃生蟹トやしや性分ドやのとくよ史ダ失法  
あくのときもといふりのトやまれつゝもくづく時  
署ううこすまかつとす脚しとうゆかうう  
やうのともかくねハドよどやそんあくせくお朱ゑ  
遠いもいもとあるはまくののつひと用みゑはゑ大  
坂大坂ゆきハゆきであるものいひがく小緒がやつる  
度を磨るとゆきをてゆのむくよゆき乃子どもがゑ

云ふ小けれ体よりのもあいそとて親乃はうちりの  
つらじとくがするのでゆきるもと難堪るゆきよの和  
ハ經れりとてゆきとくもあくうづくと親がゑとく  
極があくぬ食歎膳志魚病乃くうかとまうでそぞと  
と増のよかふりせんざんハニモくとぎも芽とく  
身の魚田小魚種前と生とくと不くへにすくも  
せだやかりとせりつ時つもく可むそふと煙  
やうこう始もくとくすればともれまほおに親  
乃つゆみへ一向せばはツスツとよつてみ合の喧嘩



の勢けいにてしきをば親も餘小役と立近不隣と申す  
祖父ぢぢよりやもいへば何らかうでも無く乃怪あくひあく  
より爲あらわる云下經よこいハツ九つ小役と親の所と管くわん  
出だして實じつ喰く事こと業わざ官くわん一いつア大おほき鬼きが出来だり  
もまたつて六月十日そくのるハがまがまり大おほき  
五月ごに連つづの中なか一年中いちゆう此こを清きよ淨じよ白しらて却たゞ  
様ようざくらぬ下げ多たて總ぜう乃の社会かみわいハ事ことと總ぜうとものの處ところ  
不ふ所しょ小こ禮儀れいぎがどどして十七八じゅうしち廿さん四よと不孝ふこう  
老おじやの私わたくしのの不役人ふえにん御ごとまで拂は若わ翁おきなむむまま

ハ教きょうのああいいトトや仕つかののと耳みみののと中なかくちくちくくよよハ  
されませぬ國くに々々世せ界かいトトやささあ交かわ今度こんど乃の乞こい付つけ  
七しちハハの時ときトト、小こいいだけだけ不ふりり生な根ねも染そめぬぬ總ぜういい交かわ  
ととととおおくくりり行ゆきののととおおいい仕つかののとと後あとよよかかまま、  
ああららにに遠とおううトトととおおもも親おののとといいううかか洞あな  
そそととてて訓く教きょうををててももううとと發は入るべべナナ方ほう金きん榜ぼう、  
ひひるるまますす教きょうハハ物もの計そろめ系けい師しハハ所ところ以よ傳つた道みち受うけ業わざ解わか惑まよ也や  
ととああききハハ所ところ乃のおおねね方ほうがが別べつらら仲なかトト大おほききの役え柄じトト  
極きわめめばばんんくくれれたたもも花はな乃のおおててののううくくみみ乃のててててももけけきき、

物乃ぐんせもあやうれどもうとくとく  
あゆもふをつりて自毛と耳もあけまく  
たゆは仕出でまと多へどもよかのやくにまよ  
我み乃后あさ自小とくべ伸延おほとくそしてとくらいたき  
てもそらゆを候ますと被まえもくり出だるのもよ  
ある事候まりと乃後あさものと多おほく候まとくとく  
うつちこくらて手评判ますとくらむよ、やくね  
のうきすのと思おもう候ましもくとくそりやけれ支まとくも  
御前ごぜん者もの多くが實立役じゆだいの仲間なかまにて取とくひ

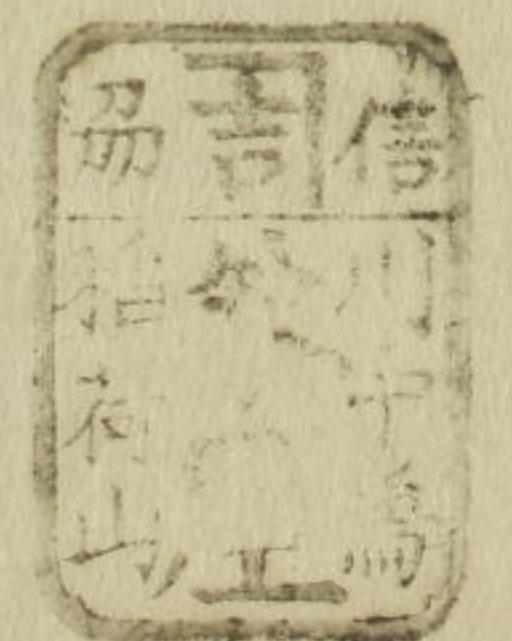
手て筋すじあらもとてきだら後ご世ようりねとくいま  
親おやの機き運うんとくやうにうとねとねとぞくとくりてばくと  
圖ずかく中なか小こ事こといくくいくく繩いと乃お様さま小こ事ことい  
やや教おは燒やるもくらゆもと引ひくとく端はりくらゆも  
対おうあくあく世よがくくくとくば情じやうあくまくのゆ  
伸延のびのびもくせとつきかれてくるうめのゆ時ときとくとく伸延のびのび  
本もとれ方かたもくらかゆゆの人ひとハ内うち乃おくもくも巻まきまくそ  
ままあこあくあくあくあくはすれあくあくは家長いえな人の宋渡そうとトトや候まくよとも

い、大切の道乃六ツ辻と云ひきりうお小舟人  
あ、はづひりの船とつてもそれがやんの石龜のむぎ  
んど代きども赤子嫁せ老ハ怪よちれ夢く、一うち  
一木と書一も子孫のたゞ中へ坐て口をくふ  
う凜で他の人へハタとる所よあてソシルぬみ子孫一乃  
経の呪乃書き一も幼がとてあ新小駄主系大坂  
でちとゆきの駄城の山よりてんてりうとう已が  
も乃清底のつり行ひとくすまに鬼と繋一幸若と  
親せち縫やての忽然人乃矣人の鬼ぐて御く近

きく、思ひよめてちんいよがくのせ一殊一と  
りよももすま、八一篇落でいふ、とくも習筆が天  
徳家業の傳玉と耕ひにさへあしぬども不麦粟豆  
まかよがぬ大根芋牛蒡といそされぬ詰と質斗と  
けくうてんびうやくだけ小もいの毛ううり  
喰れうて思ひ思ひの思ひとての思ひとての思ひと  
がくもくらううごこわーとくとも彼せんとやりと  
まこと足あくの旅人を小もひぶりいかくらんでら  
よやてよ伏せしと車よせが旅人の後おもかく放蕩

我慢の人民もすくふかくせん御へと御門もあらずて  
人乃心もあらず玉乃走れ事あが代ハ美少林万葉のす若  
比玉乃貞農事ひすもく民さくあく多難やうす  
やと多く心乃走れ天せ走れ小運されに車にお坐すわ  
形を出一車せむる人喰やあうかくさん  
とり大とやらとゆすむとゆきう園乃迷いあうけれ  
あゆの月乃光とたのちとあのがちうてとれねやとせ  
有かとよとよきびくせりとよ原はらにわをとひくと  
開路指南車下卷大尾

弘化三丙午歲五月



阿州德嶋新町橋南詰

# 書肆

江戸通南貳丁目  
京都三条通御幸町角  
大阪北久太良町五丁目

吉野屋仁兵衛  
山城屋佐兵衛  
河内屋喜兵衛

